

連載

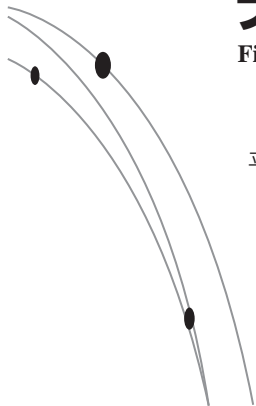
## フィールド・アイ

Field Eye

メキシコから——①

立正大学教授 苑 志佳

Yuan Zhijia



### ティファアナからの追想

メキシコの国境都市ティファアナ (Tijuana) には毎年多くの外国人が訪ねてくる。ティファアナは、メキシコの最北端、アメリカとの国境沿いに位置する人口約140万人 (2007年の訪問当時) の都市で、バハ・カリフォルニア州最大の都市である。カリフォルニア州のサンディエゴ市中心部から車で約15分、ロサンゼルスから車で3.5時間程度の距離にあるため、両都市をはじめとするアメリカからの日帰り観光客が多い。サンディエゴからティファアナへ入国の場合、米墨国境に設置された鉄の回転扉から歩いて入国できる。鉄の回転扉を押すとそこはメキシコである。入ったとたんメキシコの匂いというか、何か独特の雰囲気が漂ってくる。また、経済格差を肌で感じることができる。頻繁に声をかけてくる職業化した物売りや物乞いの人々もその一断面である。鉄の回転扉の両側は完全に別々の世界だというのが、訪問者たちが共通して抱く感想ではないだろうか。言葉は英語からスペイン語へ、通貨はドルからペソへ、光景は整然としたものから雑然としたものへ、すべてが一瞬に変わる。考えてみると、鉄の回転扉の向こう側のアメリカでは工場労働者が一時間働いて最低8ドルを稼ぐのに対して、ティファアナの場合、1ドル未満である (昨年、メキシコの1日あたりの法定最低賃金は、地域により49.50ペソから52.59ペソの間であったが、この数値は通常1年に1回新たな見直しがおこなわれる。法定最低賃金は、メキシコ経済のあらゆる部分で、賃金設定の際の基準となっている。実際に多くの雇用者は、最低賃金の倍数で賃金を提示する)。

ティファアナを中心とするメキシコ北部の国境地帯は、

アメリカ・カナダ市場向けに工業製品を生産する「マキラドーラ」(maquiladora de Exportación) として急成長してきた。マキラドーラは、製品を輸出する場合、当該製品を製造する際に用いた原材料・部品、機械などを無関税で輸入できる制度である。一般にメキシコの制度を指す場合が多いが、他の中南米諸国でもパラグアイ、ドミニカ共和国、エルサルバドルなどで同様の制度をとっている国がある。マキラドーラの最大の魅力は、アメリカの6分の1程度とされるメキシコ側の低賃金労働力を活用できることである。とりわけ、1990年代にメキシコとアメリカ、カナダとの3カ国の間に北米自由貿易協定 (NAFTA) が締結されて以降、日本やアメリカなどの各種大企業の工場が増加しており、多くの雇用を生んでいる。国境地帯のマキラドーラでは、「双子工場」といわれる形態での工場立地が盛んになった。双子工場とは、米墨国境の両側にひとつずつ補完関係の拠点を置き、経営を一元化した工場のことをいう。双子工場の分業関係のなかで、メキシコ工場では原材料や部品がアメリカ側から搬入され、労働集約的な工程がおこなわれる。一方、アメリカ工場では資本集約的な工程がおこなわれるとともに全体の管理がおこなわれる。

米墨国境地帯は血縁や教育活動に伴う社会的なつながり、国境を挟んでの双子工場体制や消費・小売活動といった経済的なつながりを持ち、相互依存関係にある。通勤、通学、買物などに伴う人の往来は1日延べ100万回に達する。アメリカ各都市の小売販売額のうち国境を越えて買物にくるメキシコ住民への販売額が占める割合は高いところで35%を占める。また、アメリカからメキシコへの輸出額の62%を国境4州 (テキサス、ニューメキシコ、アリゾナ、カリフォルニア) が占め、そのうち70%はアメリカ国境州向けである。アメリカからの輸入依存度が高く、メキシコ側国境地帯の主要産業であるマキラドーラはこのような国境両地域の経済一体化、相互依存関係の進展に大きく寄与している。しかし、地域によって経済一体化の状況は異なる。ティファアナはサンディエゴ市場に一方的に依存している。

これまでマキラドーラには、多くの日系や他のアジア系多国籍企業が加工工場や組立工場を設立していた。しかし、2000年11月からは輸出保税が廃止され、無税で持ち込めた部品にも最高で5%の関税がかかるようになっていく。付加価値税についても一部で実施さ

れるようになった。さらに、マキラドーラでは多くの企業が組立工場などを密集させたため、人件費が高騰した。こうしたことから多国籍企業のマキラドーラへの投資額は大幅に減少してきている。現在、中国などアジア地域へ工場を移転させる事例も多くなっている。なお、メキシコからアメリカに入国する場合には、麻薬などの密輸や密入国への対策として入国審査が厳重なこともあり、週末や休日を中心としてかなりの混雑が発生し、自動車、徒歩いずれにしても数時間程度の待ち時間が必要とされることがある。日本、アメリカなどの企業が進出しているティファナは、低賃金で劣悪な労働条件で知られているが、この3,4年余りの間、工場閉鎖が相次ぎ、失業が深刻化した。原材料を輸入し、組立製品化してアメリカなどへ輸出するこの工場地帯では約100万人の低賃金労働者が働いている。ところが最近では、中国が対米輸出でメキシコを抜いていることに示されているように、マキラドーラの企業が中国に移転するようになってきている。2000年以来、マキラドーラで雇われる労働者は20万人減少した。マキラドーラで働く労働者は、ほとんどが事実上の無権利状態におかれているが、そうしたなかでも他の産業やアメリカの労働組合などの支援をうけて、不当労働行為の撤回や、賃上げを要求して粘り強くたたかっている労働者がいる。

これまで筆者はこの国境都市を3回訪ねたことがある。この不思議な都市に対する印象は毎回少しずつ変わったが、「国境とは何か」ということは常に考えさせられた。一般的に国境とは、国家領域の限界をいう。国家領域は、主権国家の管轄権が空間的に及ぶ範囲であるが、国境は大きく自然的国境と人為的国境に二分

される。一直線の形となった米墨国境をみると、すぐわかるように、これは人為的に画定された国境である。周知の歴史的経緯により、今日のカリフォルニアがアメリカの国土の一部としてメキシコから奪われた。このあたりの歴史的な残留問題は今でも解決されていないようである。かつて同じメキシコ人の子孫は今、人為的な理由によってまったく別々の世界に暮らしている。2007年のメキシコ訪問の際に、メキシコの友人にティファナに位置する米墨海岸国境まで案内された。その場で見た光景は今でも頭に鮮明に残っている。太い鉄柱で作られた塀によって分けられた米墨両側には、メキシコ人の家族や恋人らしい男女が塀の隙間を通して会話したりキスしたりしていた。メキシコ人の友人の説明によると、彼らはアメリカに親族や恋人がおり、アメリカの厳しい入国管理によって簡単にアメリカに行けないため、週末になると、このような方法で在米の親族や恋人に会いにくるのだという。1990年代のNAFTA結成は、米・加・墨3国間での生産要素の自由な移動という域内統合を狙ったはずであったが、地域統合は明らかにアンバランスなものであると実感した。EUのような加盟国同士での国境開放という段階は明らかに随分先の課題になっているようである。そうしてみると、国境によって分断されたメキシコの人々が一緒になれるのは、一体いつになるのであろうか。

えん・しか 立正大学経済学部教授。最近の主な著作に『ラテンアメリカにおける日本企業の経営』（共著、中央経済社、2009年）。国際技術移転、アジア・中国経済専攻。